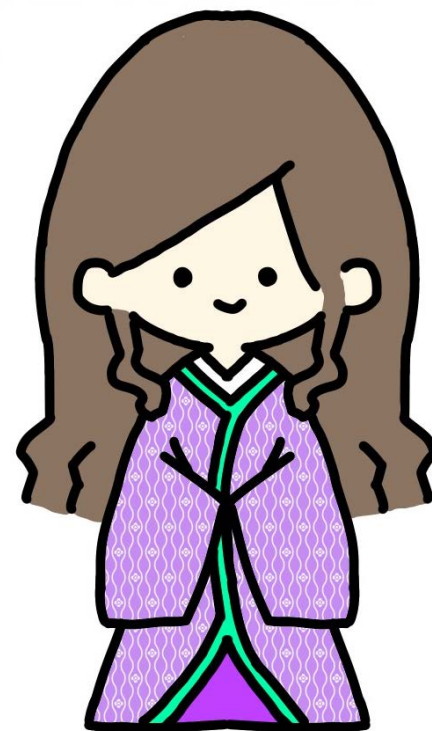


清少納言が見た人々

坂巻 星来

私は清少納言。
これから私が宮中で見た人々について語っていくわ。



雪が降ってる日に定子様と一緒にいろいろお話していると……



清少納言、香炉峰の雪はいかが

っておっしゃったの！
私は「あの詩のことだ！」って気づいたから急いで格子と御簾を上げさせたわ！

そしたら、定子様が「さすが清少納言ね」って褒めてくださったのよ！
雪景色を見て白楽天の詩での問いかけを思いつくなんて、さすがは定子様だわ！



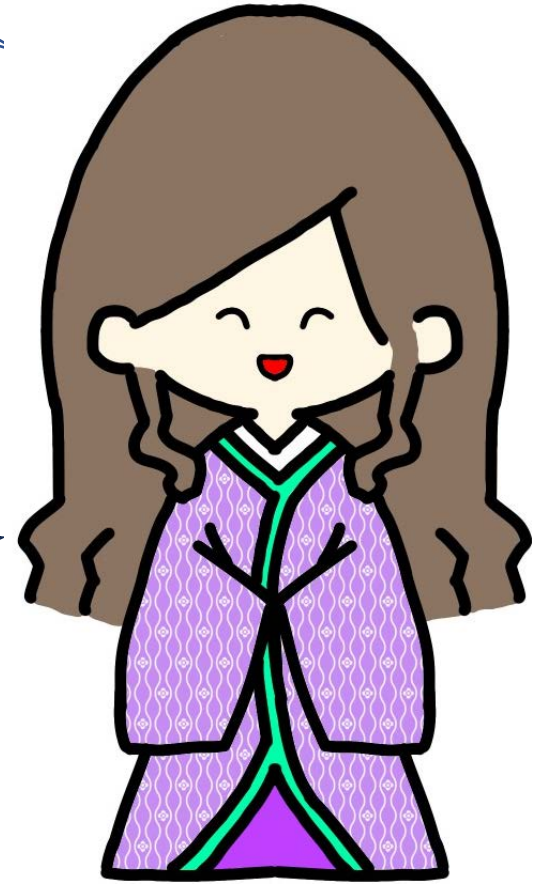
中宮定子『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」 第二八〇段

香炉峰の雪

この詩は、白楽天が権力争いに巻き込まれて田舎の廬山（ろざん）に左遷されたときに詠んだものなの。

「香炉峰の雪」はそこでの暮らしの中で、雪が積もった様子を簾をあげて見るのが特にいいって景色を褒めている一節なのよ。

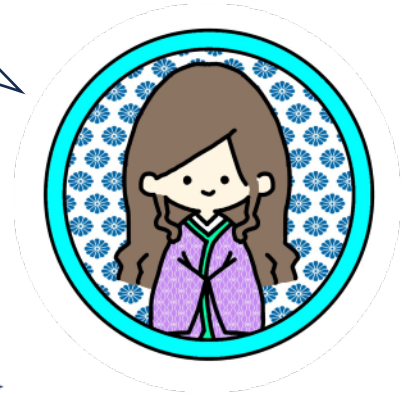
定子様は白楽天の詩の一節である香炉峰の雪を宮中の雪景色に重ねたのね。たしかに、降り積もる雪ってなんだか風情を感じるわね。



定子様の妹（淑景舎の方）が東宮に入内なさった時の道隆様の喜びはすごかったわ！
あまりにも賑やかな様子だから屏風の隙間からのぞき見しちゃったわ。

すると道隆様が私に気づいて「彼女は昔からの知り合いなのに。出来の悪い娘たちを
持ったものだ、と思われてしまう」なんて思ってもないことを得意顔でおっしゃるのよ。

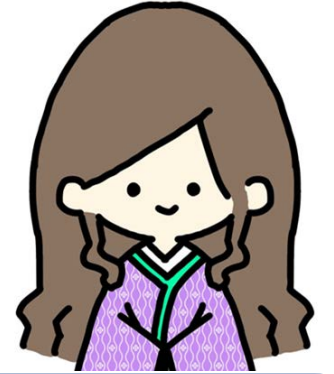
娘の入内がよっぽど嬉しかったのね、道隆様ったらその日は一日中冗談ばかりおっ
しゃっていて、その冗談に私もずっと笑ってばかりだったわ。



平安京の暮らしのアレコレ

平安時代の女性貴族には家から出ずに結婚するか女房として働くかという選択肢があったけど、私は女房として宮中で働くことを選んだのよ。

私や紫式部は女房として働く女性の代表格ね。
今でいうとキャリアウーマンかしら。



～平安時代メモ～

当時、女房ははしたない職業だといわれていたの。
女性は夫以外の男性に顔を見せるべきではないと考えていた平安時代の人々にとって女房という男性貴族とも顔を合わせるようになる女房は良い仕事とは思われていなかったようね。

失礼しちゃうわね！勝手に決めつけないでほしいわ！





雪がひどく降っている日に大納言様(伊周)がいらっしゃったの。



昨日今日は物忌みでしたが、どうしているか気がかりなので伺いました。



雪で道もないので今日は誰も来ないと思っていたのにどうしていらっしゃったんですか。

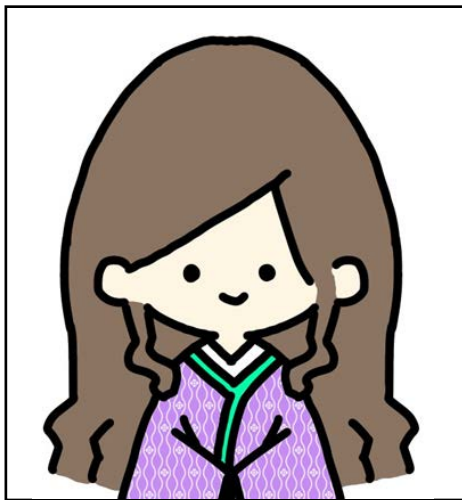


そうすれば、私のことを親切な人だと思いになってくださると思ったからです。

詩で会話するなんてまるで物語みたいで私、感動しちゃった！



清少納言について



七年間、定子様が亡くなるまで女房として仕えたの。
定子様が亡くなった後、宮中での定子様との思い出を『枕草子』に書いたのよ。



～枕草子メモ～

清少納言は癖毛で、『枕草子』でも「灯火で、私の髪の毛の節が昼間より見えてしまって恥ずかしい」などと自分の髪について書いています。
「かもじ」という今でいうエクステやウィッグのようなものを付けていたようなので、癖毛をかなり気にしていたのですね。



おしまい

提供：梅花WEB出版

ここでは話きれなかった面白い話がまだまだたくさんあるから
ぜひ『枕草子』を読んでみてね！

